

平成 21 年 4 月 23 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18530369
研究課題名（和文） 戦後日本における「家」家業経営の変容過程に関する歴史社会学的研究
研究課題名（英文） Continuity and Change of Family Business in Post-war Japan
研究代表者 米村 千代(YONEMURA CHIYO)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：90262063

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：家族、「家」、家業経営、ファミリー・ビジネス

1. 研究計画の概要

「家」と家業経営の戦前から戦後にかけての展開を、家族と経営の両側面から捉え直す、また国際比較研究への視座を持つ、さらに「家」と女性の問題という視点も含むことがテーマであり、それらを資料研究、事例研究（インタビュー）から明らかにすることが目的であった。

2. 研究の進捗状況

瀬戸内地域の塩田開発に関する「家」と経営に関する資料を収集・整理し、精読をすすめた。塩田開発における家族と経営のあり方に加えて、地域社会、そして専売制との関連が、家業経営の方向性を決定づけている。塩業の特性と地域性、時代性、そこに家族のあり方が関わっている。戦後の資料も収集しているため、その考察を今年度さらにすすめる。

また、家業経営の戦後的展開について、インタビューに基づく事例研究をおこない、現在、記録をまとめているところである。

ファミリー・ビジネスについては、資料収集とあわせてシンポジウム、コンファレンスに参加し、内外のファミリー・ビジネスに関する研究動向や社会的関心について討議した。今日のファミリービジネスのあり方については、主に経営学や実務者が関心を多く寄せているが、家族研究者がこれまで家業経営に関して行ってきた経営哲学や家族関係に対して課題が多いことがわかった。今日の社会経済的状况にあって、スモールビジネスやファミリービジネスを再生の鍵として注目する動きがあり、歴史と社会状況から家族経営のあり方を再度捉え直す必要性が再認識

されつつある。このことは、家族研究者が、歴史的視点をふまえながら、この問題にアプローチしていく重要性を物語っている。最近の研究動向からは、さらに、地域の再生というアクチュアルなテーマにとって家族企業への期待が多いこともわかった。歴史社会学的視点から、地域や経営の問題と現在の家族関係の接点を見いだしていくことは、単に歴史を明らかにすることにとどまらず、きわめて現代的な、アクチュアルな問題関心と接合しているのである。この点は、今後とも研究を進めていく。

3. 現在までの達成度

②出張による資料収集、事例研究の聞き取り、内外のファミリー・ビジネス研究の論点の整理、本研究との接合、いずれもほぼ予定通り進展している。

4. 今後の研究の推進方策

3年間、資料収集や整理、インタビューについて主に研究を進めてきた。今年は、それぞれの視角から得られた知見を分析、まとめることを主眼とする。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 米村千代、「ポスト青年期の親子関係意識：「良好さ」と「自立」の関係」、『人文研究』査読無、37号、2008年、127-150頁。
- ② 米村千代「家庭の教育力は低下したか」、『いい人に会う』、査読無、2008年、46-47

頁。

(3) 米村千代、「書評 田間泰子著『「近代家族」とボディ・ポリティクス』」、『家族研究年報』、査読無、32号、2007年、88-91頁。

〔図書〕(計 2件)

(1) 『社会福祉学習双書』編集委員会編、『社会学』、社会福祉法人全国社会福祉協議会、2009年、136-151頁(分担執筆)。

(2) 神原文子他編『よくわかる現代家族』、ミネルヴァ書房、2009年、22-31頁(分担執筆)。